

# 輝く功績

第71回岐阜新聞大賞受賞者

⑥

2011年から3期9年、飛騨農業協同組合代表理事組合長を務め、農協発展、飛騨の農業振興に多大な貢献を果たした。県農業協同組合中央会副会長など県内JAグループの要職にも就き、県の農業振興に尽力した。

組合長就任直後に放射性セシウムを含む稲わらを餌として与えた可能性がある飛騨牛が流通したという問題が起きた。「確認して大丈夫と分かったが、大変な問題だった」と回想。翌年には資産査定で多額の赤字が出たほか、関税の原則撤廃を目指す環太平洋連携協定(TPP)の問題、農協改革と次々訪れる荒波の中、難しい舵取りをこなした。

「日々、戦いだった。トップが姿勢を示すことは重要だが、一人ではできない。皆さんの協力のおかげ」と謙虚に振り返る。

飛騨牛や飛騨コシヒカリ、ホウレンソウ、トマトなど飛騨ブランドの確立と生産販売拡大に果たした役割は絶大。飛騨牛は国内はもちろん海外へ販路を広げ、飛騨コシヒカリは国際的な食味コンクールで毎年、優秀な成績を収め続け、評価を高めた。昨年の組合長退任時には新型コロナウイルスの影響を大きく受けたが、クラウドファンディングを活用した飛騨牛の消費拡大プロジェクトを立ち上げるなど「生産者、行政、農協が一

農業部門

## 飛騨の農業振興に尽力

元飛騨農業協同組合長

駒屋 廣行氏



「農業は国の基。農業は地域を発展させ、国を豊かにする」と語る  
駒屋廣行元組合長 高山市国府町宮地

体となって知恵を絞り合って長い年月をかけてつくってきた」と飛騨ブランドについてしみじみ語る。

食農教育や食文化継承、小水力発電事業など取り組みは多岐にわたるが、中でも注力したのが後継者育成。2015年にトマト研修所、19年には飛騨市、JA全農岐阜と3者による生産施設と研修施設を兼ねた飛騨牛繁殖研究施設「ひだキャトルステーション」を開所した。毎年、子牛を飛騨高山高校に寄贈し、生産者や職員らが育っている。

「農業は国の基。日本の農業は、このままでは衰退していく。素材のよさをうまく使う日本の食文化にもっと目を向け、地元産品の消費を高めるべき。それが地域を発展させ、国を豊かにする」と語る。飛騨はもちろん日本の農業発展への熱い思いは冷めやらない。

【こまや・ひろゆき】1948年生まれ。高山市出身。三菱銀行から古城農業協同組合に奉職し、飛騨農業協同組合の常務理事、代表理事専務を経て、2011年から3期9年、代表理事組合長として農協発展に貢献。県農業協同組合中央会副会長など県内JAグループの要職も務めた。高山市在住。72歳。